松方・金子物語によせて

座談会の記録

「松方・金子物語」は、二人のパイオニアというべき松方幸次郎・金子直吉両翁の生涯を通じての友情物語であり、また近代都市神戸の発展史ともいえる。**柳田義一氏・藤本光城氏・小倉敬二氏**に両翁の人となりなど思い出話あれこれを語ってもらった。

松方幸次郎のポートレート（1916）

四十年間一度もケンカせぬ

小倉　藤本さんがかいている「松方・金子物語」はちょうど神戸の発展期を代表する二人の人物だが、この二人を取上げたのはどういう動機からですか。

藤本　元来私はとても絵画がすきで、自分でこそかかないが、すぐれた作品をみるのに非常な楽しみを感じている。また、歴史小説が好きで、読みもし、自分で書いてもみたのです。たまたま研究の方向が松方コレクションにむき、松方氏の集めた美術品がいかにすぐれたものか、それらはいまどうなっているかを調べはじめたのです。一方、公爵家に生まれて、あれだけの事業とコレクションをなしとげた松方氏にも限りない興味をもって調べはじめたのだが、人に頭をさげたことのない松方氏が心から尊敬していた人物があった。これが鈴木商店の鈴木よねさんと金子直吉氏なんです。松方さんは名門に生まれ最高の教育をうけている。金子さんはいわば自力の勉強と努力でああなった人だ。境遇の正反対なこの二人に、友情と尊敬があったということに、とても興味をいだいたのです。それに私自身、一時、鈴木さんの息のかかった商店に勤務したからでもありますが。

柳田　私は子供のときから鈴木商店に出入りしていましたが、県商（現星陵高校）をでると、自ら金子さんのカバン持ちを志願したのです。そのため東京から帰りの汽車の中などで、松方さんと金子さんが雑談しているので横で拝聴したものですし、自然松方さんにもかわいがっていただいたわけです。私の父も松方・金子両氏が四十年間一度もケンカをしたことがないなんて全く感心していました。

藤本　この二人の性格はある意味で正反対だったのでよかったのです。

柳田　松方さんはあれだけ傍若無人な人だったが鈴木商店へくるとはんというのは使用人が奥さんに「おいえはん」といってよねさんの部屋にやってこられる。おいえはんというのは使用人が奥さんに対してつかう言葉だが、松方さんはよねさんに対しても、謙虚な気持でつき合っておられたようです。

小倉　この二人は神戸だけやない日本の資本主義興隆期のチャンピオンだが、いまとちがってとにかく新しい企画、新しい事業遠慮なしにどんどんやれたのだからいい時代の人ともいえるわけですな。

藤本　たしかに神戸だけの人ではありません。先日も西日本鉄道のことをしらべていたら、小曽根さんら神戸の人たちを集めて北九州電気鉄道というのを松方さんが作っているんです。間接には西鉄ライオンズの生みの親にもなるわけです。そのほか九州に発電所もつくれば京都にガス会社もある。すばらしいのはアメリカのテキサスに石油の井戸を掘って一日三千バレルからの産額を出したこともあるのです。のちに塩水がまじってダメになりましたが当時の人は考えつくことが大きい。金子さんも「煙突病患者」とあだなされたくらいです。

小倉　煙突とはつまり新しい事業で、それを立てたくてたまらないというわけですね。それだけにおもしろい話もたくさんあるでしょう。金子さんは帽子が有名だね。

帽子に氷のう、ハラにカイロ

柳田　実際あの帽子は困ったものでした。いつまでも古ぼけた帽子をかぶっている。あまりきたないのでわれわれが見かねて隠すのです。すると、商工会議所や他の会社へいってすぐ探してこいと命令する。こちらはさがすふりをして「どこにもありません」というと仕方なく新しい帽子を買うという調子です。一度下関ホテルへいったとき食堂で帽子をぬがないのです。ホテルの人が来て注意すると「おれがここの港の設備もなにもかも作ったんだ。そのおれに対して帽子をぬげとはケシカラン」といっておられた。

藤本　あれは頭に氷のうをいれておくためだったんですね。

柳田　そうそう。金子さんは貧血性でいつも頭に氷のうをのせ、ハラにカイロをいれていた。だから「柳田、カイロの火は大丈夫だろうな」といつもいっておられた。また金子さんのチンバゲタも有名だった。

藤本　金子さんが来たらゲタに気をつけろといわれたそうですね。まあそれだけ事業のことが頭一ぱいで足もとに気づかなかったので

しょうが。

柳田　松方さんは馬車で川崎造船所へ通ったのが有名ですね。とにかく公爵の息子さんだから堂々としていましたが、それが中山手の屋敷から新開地を通って会社へいく途中、職工さんが時間に遅れないよう走っていると、馬車に乗れというのです。全くこだわりのない人柄でした。ある進水式に鹿児島の旧藩主島津さんを招待されたが、関係者が上席を占め島津さんは末席におかれたので不服だった様子ですが、松方さんはなんとも思っていない。その松方さんが一度市電にのって川崎へ出勤されたことがある。ところが乗りかえがよくわからない。当時は乗りかえ切符というのがあったが、松方さんは乗りかえの度に金を払った。しかもなかなか造船所へ着かないものだから「市電はいつになったら造船所につれていってくれるのだ」とこぼしたそうです。のんびりした話です。金子さんも一度大阪へ行くのに阪急電車にのったが、それが宝塚にいってしまった。帰ってから「柳田、大阪行の電車は何本線があるのや」といっておられました。

藤本　しかしこの二人が、あれだけのことをやれたのは、やはり蔭の人がよかったのですね。松方さんには川崎芳太郎さんと永留小太郎さん、金子さんには柳田富士松さんがおられたのがいいのです。

柳田　父のことでなんだが、この二人の後で会計をやるのは全くえらいことだったでしょうね。一体なにをやらかすかわからない人物なんだから。

藤本　二人の対比といえば、松方さんは日本と欧米をマタにかけた国際人だし、金子さんは一度も外国へいったことがない。

クズの樟脳とクズのお金

柳田　一度二人が「こんな困ったことがある」という話をしておられた。松方さんは若いときロンドンで弁護士の書生をしておられたが、ときどきロンドンの貧民くつへ家賃のとり立てにいく。すると眼つきの鋭い国籍不明の連中が出てきてピストルをつきつけた。このときだけはどうしようかと困ったといわれた。一方、金子さんの方は、ある日東京で歯痛になり歯医者に治療をうけにいった。暑いものだから羽織をぬぎ、帯をといていたが、それからすぐに島村速雄海軍大将のところを訪問した。ところが奥さんが玄関へ出てみると、金子さんは帯なしの前はだけだ。ふと気がつくとこの有様、これが一番困ったときだといってられた。

藤本　この二人が例の船鉄交換問題でコンビになって世界を向うにまわしての仕事をされたのだ。当時神戸には全国の鉄屋と造船業者が集ったといいますね。

柳田　アメリカはそのころなかなかスクラップを日本に売らない。そこで条件を出して、日本が輸入したスクラップの代りに船をつくって輸出する。もちろん、ある程度こちらで鉄は使わせてもらうという条件ですが、モリスというむこうの代表者と金子さんが会って、お互いの腹をわって、スパッときめてしまった。

藤本　そのとき金子さんはアメリカの国内情勢を手にとるように知っていたといいますが、ある人が金子さんあてに打った電報代が当時の五千ドル、だがこれは日本のために役立ったのだと、全部金子さんが払ってしまった。

柳田　そんな人が一方なかなか細心で、ヒザの上で着物をたたむのです。これは少年時代質屋につとめてられたからです。勉強ももっぱら質流れの本を読んだのだといってられたがすごい博覧強記だ。ところが英語ができないので、社員と一緒に勉強をしたことがある。「神田リーダー」というのを買ってられたが全然いけない。仕方なく「英語をならうより英語のできる学校出をやとった方がてっとり早い」ということになったのです。

藤本　金子さんは先祖に大阪にいて土佐藩の財政を切り盛りした人があるのです。商才もあったが、なかなかプライドはもっていた。

柳田　金子さんが樟脳をつくっていた当時、銀行へいくと銀行員が「金子さん、おたくであれだけ樟脳をつくっておられたら、クズだって相当のものでしょう。できたら少々いただけませんか」とたのんだ。すると金子さんは「銀行では毎日毎日たくさんお金をあつかっているから、クズになったお金もあるでしょう。それと樟脳とを交換しましょう」といった。これには銀行員、完全にやられましたが、絶体クズは生産しないという信念もあったのです。また一時輸入した砂糖が湿気でかたまって仕方がなかった。そうなると売れないので頭を悩ましていたが金子さん簡単に固った砂糖を売ってしまった。その方法というのは、砂糖の中へ五銭玉をいれておくのです。すると「鈴木の砂糖に五銭玉が入っとる」という評判がたって、サッと売れてしまったわけです。こういうところは、ちょっと天才的ですね。

パンフレットで政府攻撃

藤本　井上蔵相の金解禁問題がやかましかった当時、松方さんは金子さんや武藤山治氏らとともに政府の政策に反対運動をはじめたが、そのとき松方さんは「われわれはなぜ馬鹿なのか」とか「積極か消極か」とか名づけたパンフレットを出した。この題はいまでいうキャッチフレーズだが、当時としてはとても新鮮だった。またパンフレットを出して政策を批判するというヤリ方は、松方さんが、イギリスあたりでやられていたのを輸入したものらしい。また神戸で会社の厚生施設として購売部をもうけるのが流行していたが、松方さんはそれに反対して「全神戸がわれわれの購売部だ」といわれた。これなども一事業だけでなく、社会、地元のことも考えられたわけです。

柳田　厚生施設といえば、昔、鈴木商店では店員はだれでも店で出す飯をくっていた。店員は三食くい放題だったので、一日二石の米が消えていた。

〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃〃

鈴木倒産・米騒動で無一文に

小倉　松方さんも金子さんも、いまでいうなら人間関係、ヒューマン・リレーションをうまくやったわけですね。

藤本　米騒動のとき、金子さんは柳田さんの家におられたそうだが。

柳田　ええ、私の家に数カ月居候をしてられた。ともかく、あのとき金子さんの顔が見えたらエライことでしたろう。

小倉　鈴木商店が破産したときは本当に無一文だったのですか。

藤本　財布に一文もなかったそうです。松方さんの方も、あれだけのコレクションをもちながら財布はカラッポだったのです。二人とも無一文でも平気なのだから大したものだ。

柳田　あのときはおよねさんがえらかった。舞子の別荘におよねさんを訪ねたら「エレベーターとおなんじで、下っているときは、ちょっと気持が悪いなあ」と冗談めかしていっていました。そのとき松方さんは「鈴木は日本のためにも、なんとかせにゃいかん」といってられたが、それから間もなく川崎さんが破産した。

藤本　金子さんは

質におくふんどしもなし
年の暮

と一茶ばりの句をつくってられる。金子さんは蕪村と一茶を好いてられたようだが、蕪村ばりのは

背水の陣屋をかこむ桜かな

というのがあります。

柳田　これは台湾銀行で最後の話し合いをして帰ってこられたときの作です。いつも手帳をもって狂句などつくってられたが、号は「白鼠」番頭だからということでしよう。それから片水というのがあった。これはカネコの頭文字Kがちょうど水の半分というところからです。ついでに実印には「金子萬歳」とあった。

藤本　山下汽船の山下亀三郎氏は松方、金子のこの二人を「日本の脈を見ることのできる人物だ。失敗といういい経験があるからだ」といっていました。それで、第二次大戦中は近衛さんがいろいろと金子さんに相談していたようです。

柳田　終戦前は近衛さんのアイデアで和平工作をやっていました。

藤本　ところで鈴木商店で金子、柳田両氏にまかせきっていた二世鈴木岩次郎氏もえらいですね。遊芸百般に通じて遊んでいたが、「おれが遊べるのは二人がいるからだ」といっていた。

柳田　しかしポケットマネーで学生を育てましたし、頭もいい。ときどき店に現われて要点をつかんでしかるから「ゴテボン」といわれていました。ことに金子さんが大正生命からの借入金で事業をはじめようとしたとき、鈴木さんは後藤新平さんに会って「生命保険は細かい保険掛金だから、金子のする仕事には危険だ。仕事をさせないように」と頼み込んでいます。

小倉　私が松方さんにあったのは朝日新聞がやった第一回の訪欧飛行のときだが、東京で見送った松方さんは汽車で大阪へいって、ここでも見送り、こんどは汽車でさきまわりしてモスクワで飛行機を出迎えた。いまから思えば、変なはなしだが、この飛行の協賛者として田中館愛橘博士らと一緒に働いてもらった。新しいものに対する見識というか、それはすぐれたようです。

藤本　あのとき大阪の城東練兵場を出た飛行機が天候不順のため帰ってきた。これをきいた松方さんは「この飛行は必ず成功する」といってられた。普通日本人なら、一たん出発すると、帰るのをいさぎよしとしない。ついにはムリをするという結果になるが、それがないのを喜ばれたわけです。

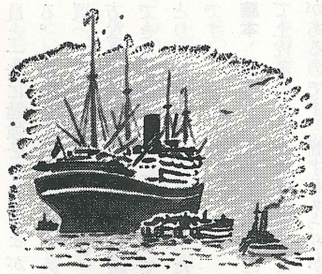
小倉　時代も変りましたが、あの二人の意気さかんだったころの神戸のように、大いにこれからもやってほしいものですね。

（昭和三十二年八月九日）

史談　ノルマントン号の悲劇

柳田義一

この事件は東海道線全通（明治二十二年）の前だったので、当時はノルマントン号のように、外国貨物船がよく旅客を便乗させて、横浜・神戸間を航行した。二十五人の日本船客（男二十人、女五人）のほか、二人の賄方が乗っていたという説もある。ノ号は一、五三三トン、貨物船なので乗客は船底の通路のような場所に毛布やふとんを持ち込み乗船していた。悲劇の一ケ月後、政府は四日間にわたり、船体の捜索をしたが、海が深くて見つからず、さらに一ケ月後の十二月十九日、天草出身の潜水夫が勝浦の沖三・三〇キロの海底に沈んでいる船体を見つけたが、引揚げは出来ずに終った。



何という国辱ぞと日本中の世論が怒りにわいたのも無理はない。明治十九年十月二十四日夜、和歌山県大島沖で沈没したノルマン号の英人船員は、日本人船客二十五人を船客に置き去りにして、自分達だけがボートで逃げてしまったのだ。「二十五人の同胞は、航海術に名も高き、英吉利人と聞くからは、ついうかうかと乗せられて名も恐ろしき荒潮に乗り入れたるぞ運のつき…」こんな歌が歌われた。義捐金を募る落語や講談のチャリティーショーが開かれ、新聞は連日、船長の処罰と治外法権を認める不平等条約の改正を叫ぶ。国民の憤りと不満は煮えたぎった湯のように激しく沸騰し続けた。

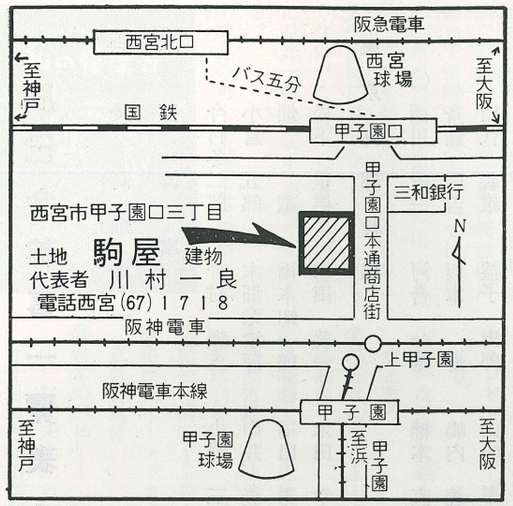
しかし、間もなくこの事件は人々の記憶から遠いた。四年後の二十三年九月、同じ場所でトルコの軍艦エルトグロール号が沈没して五百八十七人の犠牲者を出した。この事故がノルマントン号事件の影を薄くさせたことが一つ、もう一つの要素は、明治三十五年、日英同盟が結ばれる前後から「日英親善に水をさす」という遠慮から、事件の同顧が避けられたためらしい。串本公民館支館長の沖清さん「私は大正まれだが、大人になって書物で初めて知ったという」編者は金子翁在世中、車内でこの事件を語られた記憶をもっているが、当時政府の和親政策に同調して黙して語りつがれなかったようだ。船長のジョン・ウイリアム・ドレークは、神戸の英領事館の裁判でいったん無罪になったが、横浜での再審で禁固三ケ月の有罪判決を受けた。不平等条約の屈辱を身にしみて味わされた世論のあと押しで、悲劇の翌年四月には井上外相の条約改正案もかたまった。横浜の法廷に於ける傍聴筆記が紙上に連載された。それによると、ドレーク船長らは日本船客に対し、ボートに乗り移るよう勧めたが、日本人はボートを恐れ、これに従わなかった。日本人は自ら死を求めたのだ、と弁解した。しかし、ノ号の六隻のボートは、船員と船客五十四人を十分に乗せられたことがはっきりとした。裁判長は「今少し力を用いて、生命を救うことに努めざりしを悔ゆるのみと判決理由をのべ、さらに「英国の海員は剛毅にして、船客および乗務員の救護に一身を犠牲にする慣例に反したるべし」と、母国の名を汚す行為であることを強調した。当時「日本人船客をピストルでおどして船室にとじこめた」という噂さがあったが、裁判では何一つ明かにされなかった。

去る昭和四十一年の三月紀伊水道で、日本の小型タンカー「第五宝永丸」がアメリカの貨物船「ベリカン・ステート号」にぶつけられて沈没し、乗組員五人全員が死ぬという事故があった。アメリカ側は、現場が公海だという主張をタテにとって、日本側の捜査に反対したが、日本が譲らなかったために一人五百万円の補償金を払う話もまとまった。ノ号事件と比べると隔世の感があるが、国力の変化というものさしだけで問題をみては片手落ちにならないか——。

本州の最東端、大島の樫野崎灯台からの眺めは今もただ果てなく広がる荒海ばかりである。八十年前のあの夜、思いもよらぬ座礁で死の瀬戸際に立たされた気の毒な船員、そして船客達——を想像するとき寒けを催さずにはおられない。日本人だから犬畜生のように扱ったと考えるのは容易だが、とにかくドレーク船長なるものは、英人である前に鬼畜に等しく人間でないと思う。いつまでも憤がこみあげてくるではないか。

吹き浚らわれゆく蚊柱あとかたなし

四十八年四月七日記



システムパワーの
神鋼電機
SHINKO ELECTRIC CO., LTD.
取締役社長　湊　静男
本社　東京都中央区日本橋3丁目12番2号

ご家庭から
宇宙・海洋まで…
《総合化学メーカー》
石鹸・洗剤・食用油脂
工業用油脂・油剤
ペイント・ダイナマイト
過酸化物・石油化学品
熔接棒・ロケット推進薬
ニッサン　日本油脂
本社／東京・有楽町（有楽町ビル）
TEL（03）212－2311（大代表）
支社／大阪・支店／札幌・福岡・名古屋